

2020年度 第2回観察会 記録

日 時	2020 年 ①12 月 2 日(水)13:00～16:30 ②12 月 3 日(木)13:20～16:50	
観察地	京都市左京区・下鴨神社「糺の森」	
講 師	森の案内人 三浦 豊 氏	
テーマ	下鴨神社「糺の森」の地形と植生の関係、そして人々との歴史的繋がりを辿る。	
備 考	参加者 41 名 (田中克先生、スタッフ藤原、坪井含む)	記録; 坪井都子

下鴨神社・糺の杜の自然観察会を「森の案内人」三浦 豊さんの案内で行ないました。三浦さんはこの「糺」の地に生まれ育ち、現在の住まいも下鴨の生粋の京都人とのこと。郷土愛にあふれる人でした。下鴨神社の歴史と糺の森（社叢）の概要を説明されました。

- ① 京都及び糺の森の地形に関わる歴史の変遷
- ② 糺の森の植生
- ③ 「糺」の語源
- ④ 下鴨神社の歴史

1. 鴨川・高野川合流地点（三角洲）にて

京阪電車出町柳駅の西方向に高野川と鴨川の二川合流の三角州がある。ここに降り立つと、すぐ北側が下鴨神社の範囲になる。

「糺の森」は 1994 年に世界文化遺産になった。世界自然遺産でないのは町の中にも拘わらず、人との関わりによって原生林が守られてきたからである。

平安京は「糺」の地も含め、古代から湿地帯であった。それはこの二川合流の三角州の位置からもよく分かる。平安京の北東(鬼門の方向)に平安京の守り神「下鴨神社」が置かれた。度重なる氾濫の被害を避けるために、少し上流部に置かれた。

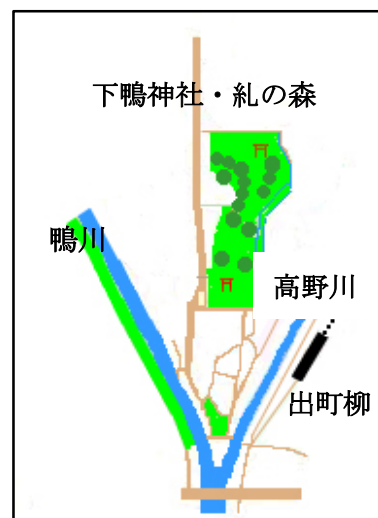
歴史を紐解くと、平安京以前の 5 世紀頃に、この沼地を田や畑に開拓するため入植が行われた。入植したのは先ず秦氏である。そして八坂氏、この地に賀茂氏、遠く山陰から出雲氏が入植した。

鴨川は氾濫の多い川であった。平安京以前は 6~7 年ごとに、平安京時代は 3~4 年ごとに氾濫した。明治政府は、暴れ川鴨川の護岸工事を行った。だが昭和 10 年大洪水に見舞われ、京都市の 3 分の 2 が水没した。再び河川改修工事を行い、それからは洪水は起っていない。

「糺す」の語源は諸説ある、

- ・その 1 「只洲」; ただの洲である。この洲を表している。
- ・その 2 「直射」; 夏至には、比叡山から南西の糺に太陽の光が直に射る位置にある。
- ・その 3 「真実を糺す」

旧下鴨神社の境内地にある京都家庭裁判所は真実を糺す所。また古典にも現れる。



二川合流の南端の三角地点

“ いかにして いかにならまし 偽りを 空に糺の神 なかりせば (清少納言)

“ 浮き世をば 今ぞ別るる とどまらず 名をば糺の 神にまかせ (光源氏)

2. 糺の森にて

「糺の森」は広さ 124,000 平方メートル。清らかな小川が流れ、原野の姿を留める森である。

(1) 糺の森の原生林には 3 種の巨樹がある。エノキ・ムクノキ・ケヤキである。

- ・エノキ：アサ科エノキ属の落葉高木。雌雄同株で高さは 20m 以上、幹の直径は 1m 以上になる。

東アジアに分布、国内では、本州・四国・九州に分布する。ゾウの肌のような樹肌をしている。

国鳥オオムラサキの食樹として知られる。大きな緑陰を作るため、ケヤキやムクノキなどと共に各地の一里塚や神社仏閣に植栽される。

- ・ムクノキ；アサ科ムクノキ属の落葉高木。雌雄同株で高さは 20m 以上、幹の直径は 1 m 以上になり、板根が発達する場合もある。分布もエノキとほぼ同じ。エノキに似るため、ムクエノキとも呼ばれる。樹皮は淡灰褐色で表面は平滑だが樹齢に伴って筋や割れ目が生じ、老木では樹皮が剥がれてくる。葉の裏面は細かい剛毛でざらついていて、漆器の木地を磨くのにも使われてきた。花期は 4-5 月頃、葉の根元に淡緑色の小さな花を咲かせ、直径 7-12 mm の球形の果実をつける。黒紫色に熟すと食べられる。甘くて非常に美味、ムクドリなどがよく食べに集まり、種子の散布にも関与している。

- ・ケヤキ；ニレ科ケヤキ属の落葉高木。高さ 20-25m の大木になり、40m を超す個体もある。

東アジアの一部朝鮮半島や中国に分布、国内では本州・四国・九州に分布する。

若い時はエノキのようにゾウの肌のような樹皮であるが、老木ではうろこ状に剥がれてくる。

新緑、紅葉のみならず扇型の樹形が見える冬季も美しく、街路樹や屋敷林として使われる。

エノキ



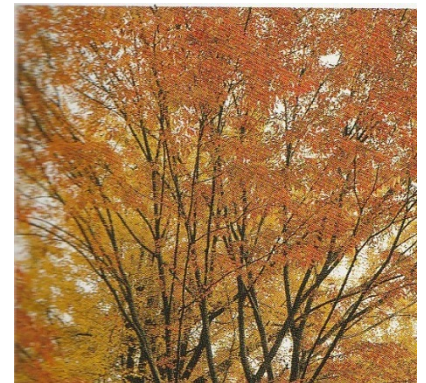
大きくきく育つので、昔は街道の目印にされた。(一里塚)

ムクノキ



下はその実と葉

ケヤキ



上は秋の紅葉、下は冬の樹形。

(2) 参道にて

参道の入口に立派な石柱の神社名が記されている。下鴨神社の正式名は「賀茂御祖(かもみおや)神社」である。

- ① 広く美しい 500m もの参道の両脇には、エノキやムクノキ・ケヤキ等の巨樹がごく自然に立っている。すると石垣の隙間から芽を出したエノキが幼木として育っている場面に出会った。

エノキは氾濫を繰り返す痩せ地でも育つ。その遺伝子をこの幼木も間違いなく引き継いでいることを証明していた。

- ② この参道の両脇にはかつて 340 軒の社家(神職の家)があった。明治 4 年の「神職世襲禁止令」によって現在は 2 軒残るのみとのこと。

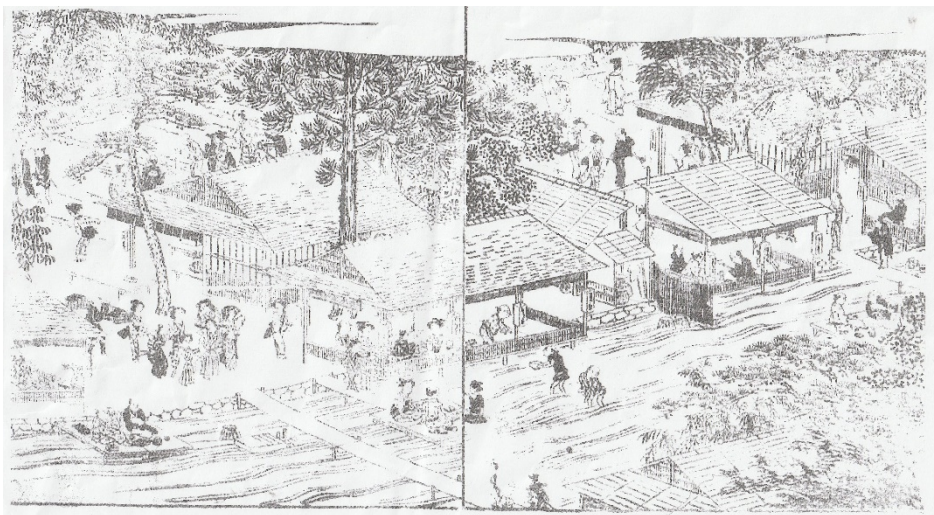
因みに現在、神官は 20 名。その 1 軒の社家の奥に川が流れ、禊用の桶が置かれていた。(右写真)

- ③ 参道左側に「京都家庭裁判所」がある。元下鴨神社の境内地内である。江戸時代には境内に「豆腐茶屋 27 軒、水茶屋 17 軒、弓場 2 軒、ところてん・団子茶屋 5 軒・瓜屋 1 軒」があった

(下鴨神社社家 鴨脚家文書 1737 年 6 月 30 日による)



エノキの幼木を見る。



江戸時代の下鴨神社境内の景観 (都林泉名勝図会・1799 年より)

- ④ 植生の変化

観察会を行った 12 月初旬、広い「糺の森」で天然のカエデやカツラがとても美しく紅葉していた。湿地の条件が薄らいだためヤナギが後退し、アカガシに交代した。

- ⑤ 式年遷宮の費用負担

20 年に 1 度の式年遷宮の費用をいかに捻出するか？

1 回の式年遷宮に 30 億円必要で、うち 8 億円は国が負担するが、残る 22 億円は自社負担となる。

2015 年 3 月、下鴨神社境内南端のバッファゾーンに、8 棟からなる低層高級分譲マンションを建設し、50 年間の定期借地権をつけて販売する計画が、新聞に大きく報道された。神社側は分譲業者から得る年間 8,000 万円の地代で、式年遷宮の費用を賄う計画で、2017 年春に建設された。地元民や市議会の反対の声が上がるも、2017 年春、神社参道脇に中層の高級マンションが建設された。



歴史的文化財の保全と必要な維持費をどのように確保すべきか、下鴨神社のみならず、貴重な文化財の多い京都市にとり大きな問題であり、慎重な検討が必要と思われるが、近年同様の問題で梨の木神社境内地にマンションが建設されるなど、経済優先の状況にある。

3、下鴨神社

(1) 歴史

崇神天皇 7 年（紀元前 90 年）に、「糺の森神地に瑞牆(みずがき)の造替を賜る」という記録があるところから、それ以前の古い時代から祀られていたと思われる。先年、「糺の森」周辺の発掘された、縄文時代の土器や弥生時代の住居跡はその裏付けの一端である。

また、社伝や歴史書にお祭り・社殿・ご神宝等の奉納等が記録されている。「続日本書紀」の文武天皇 2 年(698 年)には葵祭にたくさんの見物人が来るので警備するようと言う命令が出されたという記事もある。このことから、奈良時代より以前から当神社が大きなお社で、盛大なお祭りが行われていたことが分かる。

京都は鴨川を中心に町作りがされており、鴨川の下流に祀られているお社なので「下鴨神社」とか「下鴨さん」と親しく呼ばれてきている。

(2) 祭神と国宝社殿

西殿に「賀茂建角身命(かもたけつぬみのみこと)」、東殿には「玉依媛命(たまよりひめのみこと)」を祀る。賀茂建角身命は上賀茂神社に祀る賀茂別雷神の外祖父、玉依媛命は母。西殿、東殿ともに文久 3 年（1863）の建築で、ともに三間社流造の国宝。

(3) 神社に相応しい樹木の植生

- ① 美しい楼門を潜ると、左手に「媛小松」と呼ばれる神木のゴヨウマツある。氾濫の多い痩せ地でも元気に育つ常緑の木であるゴヨウマツは、神社の象徴的存在だと思われる。
- ② 「連理の賢木(れんりのさかき)」と呼ばれるシリブカガシがある。神社の神木と言えばサカキなので賢木の字を充てていた。連理の形態から“夫婦相和す”を表しているという。
- ③ 大自然をこの地にということで、山からツガを移植し、常緑を寿いでいるという。

(4) 御手洗池(みたらしいけ)

葵祭のヒロイン斎王代が池に手を浸し清める「斎王代御禊の儀」の池である。



御手洗池鴨神社・



糺の森の俯瞰図

おわりに

京都の街は、川の氾濫が多く湿地帯という厳しい条件の地形であったことを知りました。この下鴨神社・糺の森観察会を通して、京都の人々の自然や神への深く敬虔な想いを深く知ることができました。熱心に案内して下さった三浦 豊様に心から感謝を申し上げます。

12月2日の集合写真



12月3日の集合写真



--